

二〇一二年度

頌栄女子学院中学校

入学試験問題（第一回）

受 験 番 号

国 語

《配 点》 一〇〇点

《試験時間》 四〇分

《注 意 事 項》

- 一 合図があるまで、これを開いてはいけません。
- 二 問題は15ページの冊子になっています。答えはすべて解答用紙に記入して下さい。解答用紙は一枚で、この中に折りこまれています。最初によく確認し、ぬけているものがあつたら、手をあげて申し出て下さい。
- 三 試験が始まったら、解答用紙の左にある欄に、氏名と受験番号（算用数字で）を、正しく記入して下さい。受験番号は、問題表紙にも記入して下さい。
- 四 解答用紙の*印の欄には、何も記入しないで下さい。

※字数指定のある問いでは、特にことわりのない限り、句読点等の符号も一字分と数えます。

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

〈問題文中の※は、終わりに注があります。また、問題文は一部省略しているところがあります。〉

哲学とは

哲学といえば、たいていのひとは、ソクラテスやプラトンからデカルト、カントをへて、ハイデガー、ウイトゲンシュタインにいたる西洋哲学史上の人物を思い浮かべるようだ。そして、哲学を学ぶとは、そういうひとたちの書いたものを読んで、理解することだと思っているひとが多い。しかし、そういうやり方で、哲学の真髄に触れることは、絶対にできない。少なくとも、^①ぼくはそう確信している。

本人にとつてはどんなに興味深い、重大な意味をもつものであっても、他人の見た夢の話を書くことは、たいていの場合、退屈なものだ。それと同じように、他人の哲学を理解することは、しばしば退屈な仕事である。¹、どんなによく理解できたところで、しよせんは何かまとはずれな感じが残る。ほんとうのことを言ってしまうと、他人の哲学なんて、たいていの場合、つまらないのがあたりまえなのだ。おもしろいと思うひとは、有名な哲学者の中に、たまたま自分によく似たひとがいたただけのことだ、と思ったほうがいい。いずれにしても、他人の哲学を研究し理解することは、哲学をするのとはぜんぜんちがう種類の仕事である。

哲学というものは、最初の第一歩から、つまり哲学なんてぜんぜん知らないうちから、何のお手本もなしに、自分ひとりではじめるのでなければ、けっしてはじめることができないものなのだ。つまり、哲学の勉強をしてしまったら、もうおそいのだ。^②

そんなことをいっても、何の手だてもなしに、自分ひとり、^{※3}はだか一貫で、哲学をはじめなんてことが、ほんとうにできるものなのだろうか？ と、こう思うひとも多いにちがいない。だが、できるのだ。ぼくが読者の方々に^Aデングジュしたいやり方は、とてもかんたんなものだ。大人になるまえに抱き、大人になるにつれて忘れてしまいがちな疑問の数々を、

自分自身がほんとうに納得がいくまで、けっして手放さないこと、これだけである。

子どもは哲学する

子どもとは何だろう。そして、子どもが大人になるとは、どういうことだろう。思うに、それはこうだ。子どもは、まだこの世の中のことをよく知らない。それがどんな原理で成り立っているのか、まだよくわかっていない。では、大人はわかつているのだろうか。ある。デイドはそうだ。大人はわかつている。しかし、全面的にわかつているわけではない。

2、大人とは、世の中になれてしまつて、わかつていないということを忘れてしまつてゐるひとたちのことだ、とも言えるだろう。

ソクラテスはかつて、こんなことを言った。世の識者たちは、自分がだいいじなことを知らないということに気づいていない。つまり、わかつていないということを忘れてしまつてゐる。それに対して、自分は、知らないということを知っている。つまり、わかつていないということを忘れていない。この点で、世の識者たちよりも自分のほうがものがよくわかつてゐる、と言えるだろう、と。

③「ことを「無知の知」という。知つてゐると思ひ込んでゐるひとは、もう知ろうとしないだろうが、知らないとかわかつてゐるなら、なお知ろうとしつづけるだろう。知ることを求めつづけるこのありかたを「フィロソフィア」という。「フィロ」とは愛し求めることであり、「ソフィア」とは知ることである。つまり、「フィロソフィア」とは、知ることを愛し求めることを意味する。これが、哲学という言葉（英語ではフィロソフィ）のゴゲンだ。

だとすれば、子どもはだれでも哲学をしているはずである。子どもは、たしかに、自分が知らないということを知っている。ただ、子どもはソクラテスとちがつて、たいていの場合、大人たちもほんとうはわかつてゐないのに、わかつてゐないということがわからなくなつてしまつてゐるだけだ、ということを知らない。そして、「大人になれば自然にわかる」とかなんとか教えられ、そう信じ込まされて、わかつてゐないということがわからない大人へと成長していくのだ。

大人だつて、対人関係とか、世の中の不公平さとか、さまざまな問題を感じてゐる。しかし大人は、世の中で生きていくということの前提となつてゐるようなことについて、疑問をもたない。子どもの問いは、その前提そのものに向けられてゐるのだ。世界の存在や、自分の存在。世の中そのものの成り立ちやしくみ。過去や未来の存在。宇宙の果てや時間の始ま

り。善悪の真の意味。生きてゐることと死ぬこと。それに世の習いとしての倫理（3）、知つてゐる人に会つたらあかさつするとかの不思議さ。などなど。こうしたすべてのことが、子どもにとつては問題である。

子どもは、ときに、こうした疑問のいくつかを、大人に向けて発するだろう。だが、たいていの場合、大人は答えてはくれない。答えてくれないのは、④問いの意味そのものが、大人には理解できないからである。かりに答えてくれたとしても、その答えはまとはずれに決まつてゐる。せいぜいよくて、世の中で通用してゐるたてまえを教えてくれるか、何だか知らないがそうなつてゐるのだよ、と率直に無知を告白してくれるか、そんなところだろう。子どもは、問うてみても無駄な問いがあることをさることになる。

つまり、大人になるとは、ある種の問いが問いでなくなることなのである。だから、それを問い続けるひとは、大人になつてもまだ「子ども」だ。そして、その意味で「子ども」であるということは、そのまま、⑤哲学をしてゐる、ということなのである。

（中略）

「なぜ悪いことをしてはいけないか」と「なぜぼくは存在するのか」

（中略）「なぜ悪いことをしてはいけないか」という問題は「なぜ善いことをしなければならぬか」とともに、ドウトク^Dの根拠の問題である。子どものころ、ぼくは大人たちがこの問題に答えようとしな（それどころか問題として意識さえしていない）ことが不思議でならなかつた。ことわつておくが、ぼくは、とくに悪いことがしたわけでも、とくに善いことがしたくなかつたわけでも、ない。ぼくは単に不思議だつただけだ。ただ疑問に思つただけだ。ただ単に、ほんとうの理由を知りたかつただけなのだ。

子どもの哲学の大きな特徴は、純粋に知的であることである。それによつて何が変わるわけでもないが、ただ単にほんとうのことが知りたい。これが子どもの問いの特質である。青年も大人も老人も、全身全霊を傾けて発せられた単なる知的疑問というものがあることを忘れてゐる。ぼくの考えでは、それは⑥と同じだ。

もうひとつの「なぜぼくは存在するのか」という問題は、⑦「独我論の問題でもある。この問題は、ぼくの中でさまざまなかたちをとつた。ひとつのかたちはこうだ。歴史や科学がお話であるのなら、ぼくの人生全体もそうなのではあるまいか。

ぼく以外の人は、ぼくの世界の登場人物にすぎないのではあるまいか。世界中のあらゆる出来事^{できごと}が、ぼくというただひとりの観客のために上演されている芝居^{しばい}にすぎないのではあるまいか。^{※6}ビートルズの流行もベトナム戦争も、ぼくというただひとりの観客のために書かれたシナリオにすぎないのではないか。4、この考えはぼくを満足させなかった。ぼくひとりのために、世界がこれほど大がかりな芝居を上演しなければならぬ理由がわからなかったからである。とはいえ、そんなふうにも考えてみなければ、多数の人間の中に、ぼくという特殊^{とくしゅ}な（ぼくであるというその点で特殊な）人間がいるということがどうしても説明がつかなかった。いまも、この問題にとらえられていた当時のイヨウな感覚をありありと思い出す。不思議なことに、この問いの意味は誰にも理解されなかった。^⑦

（永井 均^{ながい ひとし} 著『子どものための哲学』より）

※1 ソクラテス・プラトン・デカルト・カント・ハイデガー・ウイトゲンシュタイン

※2 真髓^{しんずい}…… いずれも有名な歴史上の哲学者^{てつがくしゃ}。

※3 はだか一貫^{いっかん}…… 自分の体のほかに何も持たない状態のたとえ。

※4 識者^{しきしや}…… すぐれた教養を備え、ある物事や問題について考えや意見を持っている人。有識者。

※5 独我論^{どくがろん}…… 哲学の考え方の一つ。この世界のすべてのものは自分の意識の中にだけ存在していて、自分の意識を離れては何ものも存在しない、という考え方。

※6 ビートルズの流行・ベトナム戦争…… いずれも筆者が子どものころに起こった、世界的な出来事^{できごと}。

※7 シナリオ…… 脚本・台本。筋書き。

問一 || A、E のカタカナを、それぞれ漢字に直してていねいに書きなさい。

問二 1、4 に入れるのに最も適当な語を、それぞれ次のア、エの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。
ア しかし イ そして ウ たとえば エ なぜなら オ または カ むしろ

問三 —— ①「ぼくはそう確信している」とありますが、そのような「ぼく」が得た「哲学」についての結論として最も適当なものを、次のア、エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 哲学とは、やはりすぐれた哲学者の書いたものを読んで、それを正しく理解するべきものだ。
イ 哲学とは、けっしてひとから学ぶものではなく、お手本なしに自分ひとりではじめるものだ。
ウ 哲学とは、有名な哲学者の中に、自分によく似たひとを見つけることで興味深くなるものだ。
エ 哲学とは、他人の哲学を研究し理解する退屈^{たいくつ}な仕事で、つまらないのがあたりまえなものだ。

問四 ② に入れるのに最も適当な一文を、次のア、エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 勉強は哲学の近道である。
イ 哲学は勉強の終点である。
ウ 勉強は哲学の大敵である。
エ 哲学は勉強の手本である。

問五 ③ に入れるのに最も適当な語句を、問題文中より十五字以内でぬき出して答えなさい。
い。

問六 ——— ④「問いの意味そのものが、大人には理解できないからである」とありますが、「大人」はなぜ「理解できない」のですか。問題文中の語句を用いて、五十字以内で説明しなさい。

問七 ——— ⑤「哲学をしている」とありますが、その具体的な例として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア できなかった逆上がりをできるようになるまで、自分ひとりで何度も練習する。

イ なぜ友達とは受験しないのに自分は受験しなければならないのか、親にたずねる。

ウ どうしたらけんかをした友だちと仲直りできるかを考えて、先生にも相談する。

エ どうして勉強しなくてはならないのか悩み、自分なりの答えが出るまで考える。

問八 ⑥ に入れるのに最も適当な語句を、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 疑問を忘れているということ

イ 善悪を忘れているということ

ウ 哲学を忘れているということ

エ 勉強を忘れているということ

問九 ——— ⑦「この問いの意味」とありますが、その説明として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア どうしてぼくは、ほかの多数の人間とはちがうぼくであるのかということ。

イ どうしてぼくは、この宇宙に生まれ人間として生きているのかということ。

ウ どうして歴史や科学のような、でたらめなお話が作られたのかということ。

エ どうしてこれほど大がかりな芝居を、上演する必要があるのかということ。

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「私」(伊山佳奈)は小学校に入学したばかりの女の子。五月は若葉のにおいがいっぱい、道を歩いていても、急に駆け出したり、スキップしてしまったりと、わくわくする季節だ。そんなすてきな季節だから、弟の進に「今度から私のこと、カーナって呼ぶのよ」と命令した。だって「カーナ」の方が木の精のような不思議な感じの名前で、ずっと五月にふさわしいと思うから。でも、最近「私」はイライラしてる。「私」は誕生日に一番欲しい自転車を買ってもらえなかったのに、進は誕生日に自転車を買ってもらったから。そんなの不公平だ。弟が自分よりもいい思いをするなんて《差別》だ。

そんな五月のある日、「私」は団地の間の細い道に、色とりどりの様々な大きさのつつじが植物園のように咲きそろっているのを見つけた。「私」は取ってはいけなと分かってはいたけれど、次々につつじをむしっては甘いミツを吸い、捨てて歩いた。すると、「私」が歩いた道に沿ってつつじの花の曲線ができていた。「私」にはそれがつつじの道しるべに見えた。この道しるべをたどって物語の中の大好きな人たちが遊びに来てくれたら……。それは五月のすてきなお客さんにきまつてる！ そう考えて、もつともつときれいな道しるべを作ろうと夢中になっていたところ……。

最初に音がした。私はあんまり夢中になっていたので、そのすさまじいガラガラが自分のそばに近づくまで、気づきもしなかった。ガラガラガラガラ。道路を車輪がこする音。普通の自転車なら、あんなにうるさい音はたてない。ガラガラガラ。まだ自転車に乗れないチビがつけている補助輪のひびきだった。

私はふりむいて、弟の進が、真新しい補助つき自転車で、つつじの道しるべをひいていくのをじっと見ていた。大小四つの車輪が、濃いピンクや薄いピンクや朱色の花を次々とふみつぶしていく。私は自分の 1 がつぶれるような思いがした。道しるべがこわれる！

進は私に気がついた。

「あっお姉ちゃん……じゃなくて、カーナ」
彼は感心にも私をカーナと呼んだ。大きな黒目がうれしそうに光っている。進もまた、親の言いつけを破り、一人でこんなに遠くまで来ていたのだ。だいぶ心細かったところ、思いがけず私を見つけて喜んだのかもしれない。

だが、私は返事をしなかった。進は、私が手をはなし、スカートから足元にこぼれ落ちたたくさんつつじの花をまじまじと見た。

「ああ、あーあつ……」

いつけないんだつと言おうとしたのだろうが、その前に私は A 泣きだしていた。

「こわしたあ、こわしたあ、進のバカあ」

弟は自転車にまたがったまま、ひどくおびえた顔をした。でも、私は彼を指さして、泣きながらどなった。

「あんたが悪いのよ。直してよ。もどおりにしてよ」

進は自転車がふみにじった花の道しるべと私の顔をかわるかわる見比べた。そして、自転車をおりると、道に散らばったつつじの花を一つ二つひろい上げて、また私を見た。

「直してよ！」

私はさげぶ。一度かんしゃく玉がはれつすると、とことん泣きさげぶのが私のくせだった。

大切な花の道しるべ。あんなきれいなものの上をどうして自転車で走ることができるのだろう。なんでこんなバカな弟がそばにいるのだろう。急に冷たく強くなった夕方の風が、車輪にひかれた花の列をいよいよバラバラにこわしていった。

私は泣きながら自転車を足でけた。進の補助つき自転車。あのいまましい新品の自転車。 B と耳ざわりな音がして、自転車はよろめいたが、三十センチほど地面をすべっただけで、たおれなかった。

進は怒りもせず、ますます大きく目を見開いた。やがて、彼は道に散らばったつつじの花をひろい集めて、自転車のかごに入れた。つぶれた花も、無事だったのもおかまいなしにどんどんひろっている。自転車をそのままにして自分がちよこまか動きまわるため、全部の花をひろってしまうまでにはずいぶんと長い時間がかかった。

かごにぎっしり詰めこまれた明るい色の花たちは、夕ぐれの中であらうと見ええる。私は、そのもっそりとした不気味なかたまりから目をそらした。それは、つつじでも道しるべでもなく、私のぜんぜん知らない不吉でいやなものだった。

母は、私がヒステリーをおこしたのを一目で見やぶった。わけを説明しなければならぬ話していくうちに、 ② 私はちよつ

と分が悪いなと思った。

「わざとお姉ちゃんが作ったものをこわしたんじゃないわね。意地悪したんじゃないでしょ？」

母は進に聞いた。進は大きくこっくりとうなずいた。

「お姉ちゃんにあやまったの？」

^a かぶりをふる。まるで言葉をどこかに置き忘れてきたみたいだ。

「ごめんなさい、は？」

母にうながされても、進はむっと押し黙っていた。自分が悪くないと思っている時の進はひどくがんどで、誰の言うこともしかない。

「きれいに咲いているお花を、そんな風にむしっちゃいけないのよ。わかってるわね」

母はそれ以上進にかまわず、今度は私に向かって言った。

「うん」

私はしぶしぶ答える。母が進の味方についているのがわかるので、おもしろくない。

「たくさん取ったの？」

「うん」

「どのくらいたくさん？」

その質問に答えるのはむずかしかった。気が進まなくもあつた。

「百個かな？」

私は首をひねった。

「進の自転車のかごにうんといっぱい」

「そんなに取ったの？」

母は声をはりあげた。

「だめよ！ そんなに取っちゃダメ！ お花を取ったりしたらいけないの。さあ、もうしないって約束してちょうだい」
けつきよく、私が怒られたのだった。 ③ これはおもしろくないので、母がいなくなると、私は進をめいっぱいこづいた。

「明日の朝までに、お花、もとおりにするのよ！ いい？」

「どうやるんだよ」

「自分で考えるの！」

すると、進は見たことがないほどこわい目をして、私をにらんだ。大きな黒目がちちんで白目ばかりになったように見えた。

その晩は、私が先にお風呂にはいった。進とは同じ部屋を使っているが、彼はまだ、つつじの花を一階の自転車置場に放りっぱなしにしているようだった。蛍光灯が C 光る夜の自転車置場は、ずいぶんと気味の悪い場所だ。あの薄暗がりの中のつつじの花のかたまりを思い浮かべると、なんだかいい感じがしない。進はどうするつもりだろう、と私は考えた。それとも、どうもしないつもりかしら。

私はお風呂が好きで、とても長い時間はいつている。スポンジのアヒルを湯船にしずめたり、紙せつけんをとかしてみたり、シャンプーのあわで鏡に絵をかいたり、やることはいくらでもあるのだ。進とつつじの花のことはいつのまにか忘れていると、いきなり浴室のドアが開いた。

進だ。その時、私は薄い水色の湯船につかり、あがる前の《百数え》をやっていた。

「七十七、七十八……なあに？」

いきなり、ふぶきのように、紅色のひらひらがふりかかってきた。一気にぱあっと、私の頭をめがけて、濃いピンク、淡いピンク、朱色、薄紫、白のこまかいかけらが落ちてくる。鮮やかな色に飲みこまれて、私は一瞬息ができなくなる。

つつじだ。つつじのふぶき。

④ 進は、砂場用のバケツを空にしてしまうといかにも気分よさそうに、にやりとした。私はあつけにとられて弟を見つめた。頭から花びらをすくって手の平でながめると、つつじはだいぶおおざっぱに引きさかれている。それにしても、やわらかい花びらをこれだけちぎるのは、ずいぶん根気のいる仕事だろう。

ドアのしまる音がして、進は姿を消した。私は、湯船に浮かんだこまかい花びらをお湯と一緒にじゃぶじゃぶすくった。それはとてもきれいだったが、こわくもあった。花が完全に死んでしまったのがわかるので、こわかったのだ。紅や朱や濃

い桃色のかげらは、花の血のようだ。進が花を殺してしまったと思い、私は湯船の中でみぶるいした。

A棟のわき道に咲きこぼれていたつつじ。その枝先の生きている花が頭に浮かんだ時、私は悪いのは自分であることに気がついた。私がむしりとりして、私がすてて、進がつぶして、進が引きさいた。でも、最初は私だ。

自転車道するべをひいてしまった時のショックが、あまりにも大きかったため、進ひとり花をめちゃくちゃにしたような気持ちがあった。だから、母が進より私を怒るのがゆるせなかったのだ。

生きている花をつんだのは私なのに、それが美しい道しるべであるうちは、つつじが死んでいることがわからなかった。

⑤ 花が、自転車のかごの中の黒いかたまりになった時、かすかな悪い予感がめばえた。そして、進が花を小さなかけらに変える。血のような花ふぶきにとりまかれた今、私はすっかりおびえてすくんでしまったのだ。

⑥ 自分がとても残酷な気がした。明るい色の小さな花のかけらが、髪やはだやお湯の上や白いタイルの洗い場の床に散っているのを、きれいだなと思ひ、こわいなと思ひ、胸が D と鳴って苦しかった。

私は本当に長いこと、お湯の中で、身を堅くしてじっとしていた。湯気が頭につまって、なんだか首がくらくらするようだった。

「ちよっと、いつまではいってるの！」

母が私をひきずりだしにやってきた時、その力強い声に、はっとして 2 をみはった。しかし、母は私よりもっとはつとしたらしく、小さな悲鳴をあげたのだった。

「何？ 何よ、これ！」

色とりどりの《つつじ風呂》。

私はまだぼんやりとしていて、返事が頭の中に用意できなかった。母は、湯船に浮かんだつつじのかけらを手ですくいあげた。

「まあ……」

なんとも言いようがない声で、母はうめいた。

「つつじよ」

私はやつと声を出すことができた。そして、身の安全のためにつけくわえた。

「進がやったのよ」

母はお湯の中をかきまわしていたが、透明なおかしな形のかけらを、いくつか手の平にすくいあげた。それは、もちろん花びらではなかった。私はしばらく考えてみた。そして、ようやくその正体がわかった。丸めたセロテープとセメダインのかけらだ。

急にほのぼのとおかしくなった。進の気持ちだが、そっくり理解できた。弟は私に言われたとおり、傷ついた花をもとにもどそうとがんばったのだ。彼はセロハンテープとセメダインを使って、破れた花びらをつなぎあわせようとした。きっと、さんさん苦労したのだろう。どうにもならなくて、頭にきて、ついに、花をばらばらにしてしまったのにちがいないのだ。

私はなんだか、^⑦ほっとしたように明るいきもちになって、湯船から、さんぷりとあがった。

「シャワーを浴びなさい。髪にいつぱいついてるわよ」

母が命令した。

私はくもった鏡を手でふいて、自分の姿をうつしてみた。ぬれた髪に点々とほりつく、濃いピンクや朱のつつじのかけらは、なかなか悪くないがめだった、

「ねえねえ、私、ちょっと、お姫さまみたいに见えない？」

私は、手おけで湯船のつつじをひろっている母をふりかえって言った。

「はやくしなさい。かぜをひくから」

母の声はふきげんだったが、私はもう、すっかり、物語の王女のような気分になっていて鏡の前でポーズをとってみた。した。

「五月のつつじ姫のカーナよ」

私はそんな風に宣言した。そして、シャワーの水を思いきり出すと、母がまだそこにいて、

「あらあら」

と言いながら、ぬれた頭を押さえて、つつじのかけらを集めた手おけを持ったまま、あわてて外へ出ていったのだ。

(佐藤 多佳子 作 『サマータイム』より)

問一

1

2

に入れるのに最も適当な、体の部分を表す漢字一字をそれぞれ答えなさい。

問二

A

D

に入る語句として最も適当なものを、それぞれ次のア～エの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア おんおん	イ がしん	ウ ぎらぎら	エ きりきり
オ ぐらり	カ しくしく	キ どくどく	ク ぼやぼや

問三

~~~~~ a . b の語句の意味として最も適当なものを、それぞれ次のア～エの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

a 「かぶりをふる」

b 「あつけにとられて」

|                 |               |
|-----------------|---------------|
| ア 知らないふりをしてとぼける | ア 意外さに驚きあきれて  |
| イ おおげさな手ぶりで否定する | イ いかりをこえて失望して |
| ウ 頭を左右にふって承知しない | ウ 涙も出ないほど悲しんで |
| エ 首を垂れて降参の意志を表す | エ おそろしさにふるえて  |

問四

—— ① 「大きな黒目がうれしそうに光っている」とありますが、その理由を「私」はどのように考えていますか。問題文中の語句を用いて、三十字以内で答えなさい。

問五 ——— ②「私はちよつと分が悪いなと思った」とありますが、なぜそのように思ったのですか。その説明として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 進がつつじの花の道しるべをこわしてしまったのを見て、感情にまかせてどなってしまったから。  
イ 母は「私」がいつものヒステリーをおこして一方的に怒ったと考え、進の味方についているから。  
ウ 少しだけ取るならまだしも、今日は気がいたら百個ものつつじの花を取ってしまったから。  
エ 進がつつじの花の道しるべをわざとこわしていないことが、話しているうち明らかになったから。

問六 ——— ③「これはおもしろくない」とありますが、このとき「私」はどのようなことを期待していたのですか。その説明として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 母が、つつじの花の道しるべをこわされてしまった「私」は悪くないのだと思ってくれること。  
イ 母が、つつじの花の道しるべのすてきさを理解し取ってしまった「私」に共感してくれること。  
ウ 母が、つつじの花の道しるべをこわした進をしかって「私」にあやまるよう導いてくれること。  
エ 母が、つつじの花の道しるべは進の自転車によってわざとこわされたのだと信じてくれること。

問七 ——— ④「進は、砂場用のバケツを空にしてしまうといかにも気分よさそうに、にやりとした」とありますが、なぜ「進」はそのような行動をとったのですか。その説明として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分のことは棚にあげて一方的に責め、さらに無理難題を押しつけた「私」に対してうさばらしができたから。  
イ 道しるべをこわしたことのかわりに、鮮やかなつつじの花びらをふりかけてお風呂を彩ることができたから。  
ウ 突然、引き裂いたつつじの花びらをまいてお風呂を真っ赤に染めたことで「私」を怖がらせることができたから。  
エ 言われた通りに傷ついた花をもとにもどそうとした自分の努力を「私」に見せつけ、証明することができたから。

問八 ——— ⑤「花が、自転車のかごの中の黒いかたまりになった時、かすかな悪い予感がめばえた」とありますが、「かすかな悪い予感」とはどのようなことの「予感」だったのですか。問題文中の語を用いて、五字以内で答えなさい。

問九 ——— ⑥「自分がとてもとても残酷な気がした」とありますが、なぜそのように思ったのですか。問題文中の語句を用いて、六十字以上八十字以内で説明しなさい。

問十 ——— ⑦「ほつとしたように明るい気持ちになって」とありますが、「私」はどうして明るい気持ちになったのですか。その説明として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 湯船に浮かんでいるつつじの花のかげらが怖くなっておびえていたのだが、よく見るとその正体が花びらではなくたいたしたものではないということがわかって安心したから。  
イ 進とのけんかによって仲がこじれ気まづくなっていたのだが、進が花をもとどりにすることで「私」と仲直りしようとして努力してくれたことがわかってうれしくなったから。  
ウ 進が花を「私」にふりかけた行為に悪意があったのではないかと思つたが、本当は花をもとにもどそうとして思い通りにいかず腹を立てただけであることがわかったから。  
エ ばらばらにした花の小さなかけらを湯船にふりまいてしまったことは進が一人で勝手にやったことであるので、「私」はこの件について責任がないということを確認したから。

問十一 主人公である「私」はどのような女の子であると考えられますか。文章全体からその長所と短所をふまえて考え、自分の言葉で説明しなさい。

\*問題はここまでです。

[illegible][illegible]

| 氏 名 |
|-----|
|     |

|      |
|------|
| 受験番号 |
|      |

|                                     |   |
|-------------------------------------|---|
| 得                                   | 点 |
| <p style="text-align: right;">*</p> |   |